

定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その8）

その他のタイトル	Community Clinical Psychological Support of an Evening High School (VIII)
著者	内藤 みなみ, 廣? 眞波, 坂? 理史, 坂田 美幸, 船越 梨乃, 結城 晟亜, 中田 行重
雑誌名	Psychologist : 関西大学臨床心理専門職大学院紀要
巻	8
ページ	41-48
発行年	2018-03-16
URL	http://hdl.handle.net/10112/13180

定時制高校に対する地域臨床的支援の試み (その8)

Community Clinical Psychological Support of an Evening High School (VIII)

内藤みなみ 廣瀬眞波 坂崎理史 坂田美幸
船越梨乃 結城晟亜 中田行重

関西大学大学院心理学研究科心理臨床学専攻

Minami NAITO, Manami HIROSE, Satoshi SAKAZAKI, Miyuki SAKATA,
Rino FUNAKOSHI, Seia YUKI, Yukishige NAKATA
Graduate School of Professional Clinical Psychology, Kansai University

◆要約◆

ある定時制高校への大学院生による地域臨床的な支援活動は今年で8年目となった。今年度も「改訂版支援モデル(循環型)」に基づいて、校内巡回、教室内支援、グループワークの実施、先生方との共有ファイルによる情報共有、広報活動を行った。今年度は従来の週2日から週3日の支援体制としたことにより、不登校気味の生徒と会う機会が増え、我々の活動の周知にも繋がった。しかし、8年目という長期にわたる支援活動にも関わらず、活動の浸透化や先生方との連携が未だ不十分であると感じた。特に、我々が考える支援と先生方のニーズを上手くすり合わせることに難しさがあった。今後の支援継続にあたり、先生方と関わる機会を積極的に設けるべきである。充実した支援活動を行うために、環境に働きかけることが必要不可欠であろう。

キーワード：定時制高校、学校支援、グループワーク

Abstract

It has been 8 years since a team of graduate students began offering psychological support to an evening high school. This year, we continued to enhance support activities based on “the revised support model (circulation type)” from the previous year, by moving throughout the school, supporting students during class, producing a group work project, sharing students’ information with the teachers through shared files, and making our activities known through a newsletter and personal communications. By changing our support activities from twice a week, to one to three times a week this year, we were able to increase our contact with students who tend to be absent from school. Consequently, awareness of our activities among students increased from the previous year. Despite this increase, our activities do not seem to have been sufficiently integrated into the school system, even after 8 years. Specifically, there are difficulties in matching the activities of our support model with the teachers’ requests. It is discussed that, for the benefit of

the students, we should have more opportunities to interact with teachers.

Key Words: Evening High School, Supporting School, Group Project

I. はじめに

ある定時制高校における地域臨床的な支援活動も、筆者らで8年目を迎えた(中田・中村・日野ら2011;倉石・横谷・梅井ら2012;山見・細見・吉川ら2013;井上・大川・渋川ら2014;清水・妹尾・有福ら2015;清澤・川田・構ら2016;松下・中森・植松ら2017)。これまで、定時制高校の支援要請に対して教員と大学院生によるチームを組み、主に大学院生がボランティアとして支援する試みを続けてきた。これまでの活動を通し、井上・大川・渋川ら(2014)は、「改訂版支援モデル」を提示した。清水・妹尾・有福ら(2015)は、改訂版支援モデルの有効性を明らかにすると共に、「改訂版支援モデル(循環型)」を提示した(図1,付録参照)。このモデルでは、①浸透化⑤支援メンバー内の活動⑥先生との連携が、②グループワーク(以下、GW)③相談活動④教室内支援に相互作用しており、両者を充実させることで良い循環が生まれることを示した。また特に①と⑥を継続することで支援活動の基盤ができ、より充実した支援に繋がることを指摘した。

今年度は、昨年と同様に「改訂版支援モデル(循環型)」(清水・妹尾・有福ら,2015)に基づき、活動を行うこととした。

本稿では、松下・中森・植松ら(2017)に引き継いで行った活動内容の報告に加えて、新たな取り組みや、活動内容の変更点について報告する。

II. 今年度の活動経過報告

1. 基本的な活動

今年度の支援体制、活動内容を以下に簡潔に記載する。

本活動は筆者ら大学院生6名(以下、支援メンバー)と1名の教員で構成されていた。支援活動時間は、給食時間から3限終了時刻(19時15分~20時25分)であった。

4月から7月までの前期では、前年度に引き続き活動日を月曜日と木曜日の週2日とし、支援メンバーが3名ずつに分かれて担当していた。しかし1日の活動内容は支援メンバー2名で妥当であることや、活動日数の増加によって生徒や先生にとって少しでも駐在感が増すことなどをねらいとして、9月以降の後期は、活動日を水曜日、木曜日、金曜日の週3日に増やし、支援メンバーが2名ずつに分かれて担当した。

場所は校内の一室を借り、「ほっとステーション(以下、HS)」という名称で生徒相談室を開室し、相談活動を行った。その他にも校内巡回、教室内支援、GWを行った。さらに、文化祭、餅つき大会などの学校行事にも積極的に参加した。

2. 活動方針の設定

今年度の活動を始めるにあたり、3月に支援メンバーで話し合いを重ね、事前に活動方針を設定して臨んだ。今年度の課題としては、昨年度に焦点をあて支援していた生徒が卒業や転校のために今年度には引き継がれないことが挙げられた。そのため支援対象とする生徒を新たに増やしていくことが必要と考え、より多くの生徒とかかわりながら観察することを当面の活動方針とした。しかし実際に観察するだけでは得られない情報も多くあると考えられたため、生徒の様子をより知るために、先生方との関係を築くことも大きな課題とした。よって今年度の活動方針としては、生徒と先生方の双方と一から関係を作っていくつもりで、支援メンバー側から積極的にかかわっていく事を活動の基本とし、活動内容を決めていくこととなった。

3. 相談活動

昨年度はHSに支援メンバーが1～2名常駐し、来室した生徒の悩みや困りごとなどさまざまな話をした。しかし昨年度来室していた生徒は全員卒業し、今年度は自発的にHSに来室する生徒が全くいない状況から始まった。そのため生徒の往来が少ない場合はHSを閉めて教室に支援メンバーが出向き、HSは生徒や先生方と話す際に必要に応じて使用する形を取った。

4. 校内巡回

昨年度に比べて今年度は、HS内の活動よりもHS前の共有スペースであるコモンスペース（以下、CS）や教室を校内巡回する活動に重点を置いて行った。これは清水・妹尾・有福ら（2015）が提示した改訂版支援モデルの①浸透化に基づくものであり、3の相談活動に述べたようにHSに自発的に来室する生徒がいない状況にあったことから、生徒に対するHS及び支援メンバーの存在周知や、生徒との関係づくりを行う必要があると支援メンバーら自身が感じたためである。校内巡回では給食時間を利用して行い、積極的に生徒へ声をかけるように心掛けた。また、生徒だけでなく職員室の先生方との関係づくりも目標のひとつとし、支援メンバーから生徒の様子を尋ねることを継続的に行った。

後期になると給食時間にCSに集まる生徒が増えた。中には、前期は保健室で過ごすことが多かったが後期になると継続的にCSに訪れるようになった生徒もいた。

5. 教室内支援

昨年度同様に、先生方を対象として4月に教室内支援についての希望調査を行い、前期は返答のあった授業にのみ入って支援を行った。支援を行うに当たって、学習指導ではなく心理的援助として、学習へのついていきにくさへの解決法や生徒一人一人のモチベーションを探ることなど、学校生活全体に対しての意欲を向上させるかわりに繋げることを目的とした。また

その旨を希望調査シートに添付し、先生方への説明にも重点を置いて前期の活動を行った。

その後、“意思疎通を図る会”にて、どの授業にも基本的に自由に入ることへの許可を頂いたため、後期は多くの授業に入ることができるようになった。「意思疎通を図る会」については7の情報共有で詳しく述べることとする。

6. GW

2年目（倉石・横谷・梅井ら2012）から毎年2回、1年生を対象にGWを行っている。実施期間は昨年同様、前期（6月）と後期（2月）であり、後期のGWは論文提出期日時点では実施されていないため、本論文では主に前期のGWについて述べる。

前期のGW実施にあたり、1年生の担任の先生と4月より話し合いを重ね、昨年同様に生徒同士の交流関係を広げることを第一の目的とした。先生から、生徒同士が仲良くなった2学期頃になると、相手を意図せずに傷つける言い方をしてしまうことがよく見られるため、伝えることの難しさや楽しさを感じられるような内容であれば良いとの要求があった。そのため、アサーションの要素も取り入れて行うことにした。さらに、支援メンバーと生徒とのラポール形成の場にしなから以後の支援活動へのきっかけづくりにできればということも、先生と話し合う中で加えられた。

以上のことを踏まえて、前期のGWでは“自己紹介クイズ”のワークを行った。参加者を4名ずつのグループに分け、各グループには1名ずつ支援メンバーがファシリテーターとして配置した。手続きとして、始めに参加者は紹介カード（図2、付録参照）に書かれた質問項目に答えを記入する。その後グループごとに参加者の書いた紹介カードをまとめてシャッフルし、1枚ずつめくりながらどの参加者が書いたカードかを考えていくというものである。ワークを始める前にはメインファシリテーターがアサーションについて説明し、ワーク終了後にはふりか

えりシート（図3、付録参照）を配布してアサーティブなかかわりができたかについて振り返る時間を設けた。

GW終了後にはフィードバックを作成し、後日渡した。生徒にふりかえりシートに担当ファシリテーターからのコメントを記入したものを渡し、先生方には生徒が振り返った内容とそれに対するファシリテーターのコメントを表にしたものを渡した。

7. 情報共有

(1) 学校との情報共有

活動終了後、その日かかわった気になる生徒の発言や様子などを所定の用紙に記入し、学年別のファイルに保管した。これによって、活動内容の視覚化や生徒に関する様々な情報の共有を図った。また、必要に応じて各学年の担任および教科担当の先生方と話し、より深みのある情報共有を行った。

前期の活動では、先生方のニーズと支援メンバーの活動内容に隔たりを感じるがあった。そこで先生方の意向で、後期の活動開始以前に“意思疎通を図る会”を開き、先生方のニーズを把握し、支援メンバーの活動方針を話し合うことになった。“意思疎通を図る会”には、校長や教頭をはじめとする先生方および教員も参加した。また、支援メンバー6名全員および教員も参加した。

(2) 支援メンバー内の情報共有

昨年度まで支援メンバー内での情報共有の手段は、主に紙媒体で行われていた。今年度は支援メンバー内でより密な情報共有を図るために、週に1日支援メンバー全員が集うミーティングを行った。ミーティング内では、かかわった生徒や教室支援に入った授業の様子、先生方から得た情報について共有し、その後の対応について話し合った。支援メンバー全員でコミュニケーションをとる時間を設けたことで、一貫性と連続性を持った活動ができるよう努めた。

8. 広報活動について

今年度も支援メンバーおよびその活動の浸透化を目的に広報活動を行った。最初の広報活動は始業式の挨拶であった。今年度は支援メンバー5名（1名欠席）が始業式に出席し、新入生を含めた全校生徒に向けて、HSの開室曜日と開室時間、活動内容の説明や支援メンバーの紹介を行った。

継続的な広報活動としては、“ほっとステーション通信（以下、HS通信）”を各支援メンバーが1回ずつ担当し、1年間に6回発行することとした。HS通信とは、支援メンバーの認知と定着を目的とし、清水・妹尾・有福ら（2015）が開始したものである。

前年度に引き続き、HS通信には支援メンバーの名前や顔写真を掲載した。今年度のHS通信の特徴は2つある。1つ目は、HS開設日カレンダーを載せたことである。これによって支援メンバーの活動日の周知を図った。2つ目は、各支援メンバーが生徒に伝えたいことをコラムという形で載せたことである。このように様々な話題を提供することで、生徒や先生方の多様なニーズに応えることができると考えた。

HS通信は先生方を通して生徒に1枚ずつ配布され、HSにも掲示した。

Ⅲ. 考察と今後の課題

1. 基本的な活動

支援メンバーの活動日を週2回から週3回に変更したことに関して、支援メンバーの印象としては、周知がされやすくなったり、休みがちな生徒に関われる回数が多くなったりしたという実感がある。しかし未だ探索段階であると思われるため、次年度以降でも工夫が求められるだろう。

2. 相談活動と校内巡回

今年度からはHSへ自発来談する生徒が乏しい状況下で、支援メンバーは生徒たちを受動的

に待っている姿勢ではなく、積極的に存在をアピールしながら要支援生徒を発見していく必要性があった。この点において私たちが特に課題だと感じた点は、初対面の生徒へのかかわり方である。イヤホンをつけながら歩き、支援メンバーには目を向けられない生徒や、支援メンバーから話しかけられても無視のような態度の生徒もあり、こちら側が抵抗感を抱く場面は多い。特に年度初めの時期は、支援メンバーの方にも緊張感があったり学校内で疎外感があったりとその心境は穏やかでなく、生徒へかかわりに行けないことを得てして他の責任にしてしまう傾向もあった。年度初めにかかわりに行く際は、勇気を出して自身にも生徒にも正面から向き合うことで、課題を乗り越えることは可能であろう。生徒のアセスメントでは、実際にかかわりをもつことによって促進される部分が大きく、必然的に関わる生徒の優先順位も決まる。これは先生方との関係づくりにおいても同様である。

3. 教室内支援

教室内支援においても、やはり年度初めは動きにくさや、これでよいのだろうかという感覚を覚え、活動そのものの足かせになっている時期があったように思われる。その理由は2点考えられ、1点目は、授業内に入る支援メンバーの立場や目的が、先生方・生徒たちのなかで確立されていなかったことが挙げられるだろう。2点目は、支援メンバー本人の要因、すなわち枠のない中で生徒にどうかかわるかという確かな自信と感覚を個々人で抱けていなかったことが挙げられる。これは、支援メンバー同士では教室内支援における活動内容や目標の共通認識を持っていたが、実際の現場で行うには、さらに個々人で感覚をつかむことが必要と思われる。しかしこの点は、実習も十分に経験できていなかった支援メンバーには、ある程度致し方のないことかもしれない。実際に学校側の支援環境も良好とは言えず、年度初めに先生方全員を対象とした教室内支援希望調査シートの返答はわ

ずか2名分にとどまることもあった。また、後期には“意思疎通を図る会”によって全授業の入り込みが公的に認められたものの、前期は先生方間でそのような認識がなく、支援メンバーは活動しづらい感覚を抱いていた。

このように活動しづらさの要因は支援メンバーにも学校環境にも認められるが、その中で最大限の支援をするためには、私たち支援メンバーは何を目指して生徒とかかわるのか、教員ではなく心理の専門的な観点からどのように考慮しているかということを中心に振り返りながら地道に臨んでいくことが肝要なのかもしれない。

4. GW

津村（2012）は、「体験を通して学ぶためには、体験するだけでなく、まずは、どのような体験をしたのか、学習者は体験を内省することが大切」とし、ふりかえりが体験から学ぶためには欠かすことができない活動と言えると述べている。ワーク終了後、生徒たちにふりかえりシート（図3、付録参照）を記入してもらった。それによって、参加者はワークを通して得たものがより明確となり、自己理解の促進にも繋がりがやすくなったのではないかと考えられる。ただし、授業時間45分での実施だったため、ふりかえりシートの項目数は少なく、グループ内での共有の時間も満足に取るができなかった。短時間で実施するには、ワークとふりかえりの時間の配分が難しく、ファシリテーターには工夫が求められる。

GW“自己紹介クイズ”は、入学して間もない1年生同士がお互いを知り合い、交流を深めるきっかけになったと言える。入学当初から不登校気味だった1年生のAさんは、クラスメイトとの話しづらさを支援メンバーに打ち明けていた。自分に話しかけてくれるクラスメイトはいるけれど、休んでいる自分はその子のことを何も知らないから話しにくいと話した。支援メンバーは、“自己紹介クイズ”がクラスメイトのことを知る機会になると考え、Aさんを誘い一

緒にGWに参加した。GWに参加したことによって、Aさんは自分と同じ趣味を持つ生徒がいることを知り、すぐにその生徒と仲良くなった。その生徒をきっかけに、Aさんは他のクラスメイトとも交流を深め、以前感じていたクラスメイトとの話しづらさも次第になくなっていったようである。クラス内に仲の良い友人が出来たAさんは、それからほぼ休むことなく登校している。

5. 情報共有

(1) 学校との情報共有

昨年度に引き続き、共有ファイルはそれぞれの学年の職員室に分けて保管している。これにより、全ての学年の先生方と接する機会が作れ、活動の浸透化に繋がったと思われる。しかし、実際には先生方に見て頂けないことも多く、必要に応じて各学年の担任や教科担当の先生方に直接伺い、生徒の情報共有を心掛けた。先生方と会えなかった場合は机にメモを残したり、次に支援に入るメンバーに伝言を頼むことで、共有ファイルに目を通してもらえるよう工夫をした。これによって、より綿密な情報共有ができたと思われる。

後期の活動開始以前に行われた“意思疎通を図る会”では、先生方から多数のご意見を頂いたと同時に、支援メンバーが支援の中で感じていることを先生方に伝えることができた。これは、支援メンバーができる支援と、先生方のニーズをすり合わせる機会になったと思われる。前期は生徒だけでなく、先生方とどうかかわれば良いのか分からず、一步を踏み出せない支援メンバーも少なからず存在した。先生方も支援メンバーをどう使っていけば良いのか困惑していた方もおられるだろう。1人が週1回、数時間の活動時間では、生徒だけでなく先生方とのかかわりも不十分で終わることが多々ある。支援メンバーにとってこのような会を設けて頂くことは、支援への動機付けが高まる一因にもなると考えられる。今年度は後期の活動開始以前

に開かれたが、可能ならば前期の活動開始以前にこういった場を設けて頂き、先生方のニーズと支援メンバーの活動方針を照合しながら調整し、生徒に対する支援へ取り組んでいくことが望まれるだろう。

(2) 支援メンバー内の情報共有

週に1日ミーティングを行うことで、生徒の継続的な様子を共有することができた。その上で、気になることがあれば支援メンバー間で話し合い、迅速な対応を心掛けた。支援メンバー全員が一貫した行動をとることで支援メンバー内での連携強化が進んだと考えられる。また先生方からの意見や相談に対しても早急に対応することで、先生方の連携の一助になったと思われる。情報共有の時間を設け、メンバー全員が共通の認識を持つことは、よりよい支援に繋がると言えるだろう。

6. 広報活動について

HS通信には支援メンバーの活動日が一目でわかるよう、開室日カレンダーを載せた。これにより、支援メンバーの来室日が視覚的に理解しやすく、浸透化に繋がったと思われる。コラムに関して、生徒からは感想や意見がなかったものの、支援活動の中で先生方から頂くことがあった。このことは、HS通信が先生方と支援メンバーの関係性を形成する一助になると考えられた。

IV. おわりに

定時制高校の支援を行うにあたり、「改訂版支援モデル（循環型）」を意識し活動を続けてきた。8年目という長期にわたる支援活動にもかかわらず、①浸透化 ⑥先生との連携が不十分であるように感じられた。これら2つの支援の基盤を形成するために不可欠な要素が欠けていた理由として、支援活動が8年目ということもあり、学校側のニーズを改めて確認することを

怠ったことなどが挙げられる。来年度以降は、より密に先生との連携をとりながら、基盤の維持・成長を目標としつつ、より充実した支援活動ができることを願っている。

謝 辞

今年度も貴重な学びの機会を与えてくださった定時制高校の皆様方に感謝致します。今後とも尽力して参りますので、引き続きご協力のほどよろしくお願い致します。

文 献

- 井上奈々・大川慧・渋谷沙由里・中西達也・西中さおり・矢野礼花・清水達哉・妹尾美鈴・中田行重（2014）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その4）—改訂版支援モデルの提示—『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』4：11-20.
- 清澤千絢・川田麻菜美・構美穂・向坂俊佑・佐藤栞・高橋圭佑・中田重行（2016）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その6）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』6：67-74.
- 倉石百合子・横谷美幸・梅井茜・高石唯・船曳奈央・中條淳博・津田雅志・中田行重（2012）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その2）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』2：71-78.
- 松下秀平・中森涼太・植松大起・太田靖子・下枝里子・中谷汐里・中田行重（2017）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その7）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』7：19-28.
- 中田行重・中村絢・日野唯花・丹羽由子・福山侑希・菅野百合子・横谷美幸（2011）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その1）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』1：23-31.
- 清水達哉・妹尾美鈴・有福和・羽田野瑛子・宮地佑香子・結城進矢・向坂俊佑・佐藤栞・中田行重（2015）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その5）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』5：109-117.
- 津村俊充（2012）：『プロセス・エデュケーション 学びを支援するファシリテーションの理論と実際』金子書房：p.206.
- 山見有美・細見知加・吉川真衣・西中さおり・中條淳博・津田雅志・中島妃佳里・井上奈々・中田行重（2013）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その3）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』3：79-87.

【付録】

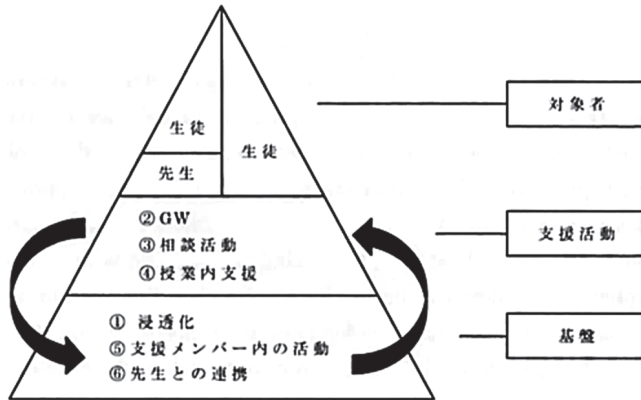


図1. 改訂版支援モデル(循環型)

No.

<紹介カード>

① 好きな色は何色？

② 夏休みには〇〇したい！

③ 8000円を自由に使えるなら？

図2. 紹介カード

♪♪♪♪♪♪

ふりかえりシート

氏名 _____

① 今回のグループワークで、自分やみんなのことについて新しくあるいは改めて知ることができましたか？(○をつけてください)

1. 全くできなかった 2. できなかった 3. どちらでもない
4. できた 5. よくできた

どんなところが？どんな風に？(あれば)

② 自分の意見をうまくグループのメンバーに伝えることができたと思いますか？(○をつけてください)

1. 全くできなかった 2. できなかった 3. どちらでもない
4. できた 5. よくできた

どんなところが？どんな風に？(あれば)

③ このワークを通して、あなたが気づいたことや感じたことを何でも自由に書いてください。

④ 院生からのコメント(このシートは回収して後日返却します！)

図3. ふりかえりシート